

へ法免書肆ほふめんしよしです書物代しよぶつだいと載いり  
 まゝ多おほア左様さようですか未ま月つき七なな日ひ参まゐり  
 の顔かほを三度さんどモ此度このども勘忍かんじんを据すへ  
 り込こめられそこで書肆しよしの言いはれるにナニ飯沼いひぬま  
 一休いっしゆ和尚わしやうの話わたりを去集かぢふて々々多おほく書物しよぶつ  
 代だいも堪たへてやるとの事ことは私わたしも金かねに  
 ある事ことふとて和尚わしやうの話わたりをかき集あつ  
 め書ふやの主ぬしは渡わたり帳面ちやうめんに長ながの字じを





一休和尚  
答

斯かくして行ゆくとて口くちを手てふて圖づの如ごとく

蠅おと川が新あら老は工ま門ん  
問  
極こく樂らくへも  
如何いかして  
わくや





横よこに引ひて貫ぬひまらしむことを其その終おひに記る

置おくも直すかる心こゝろ地ちにて

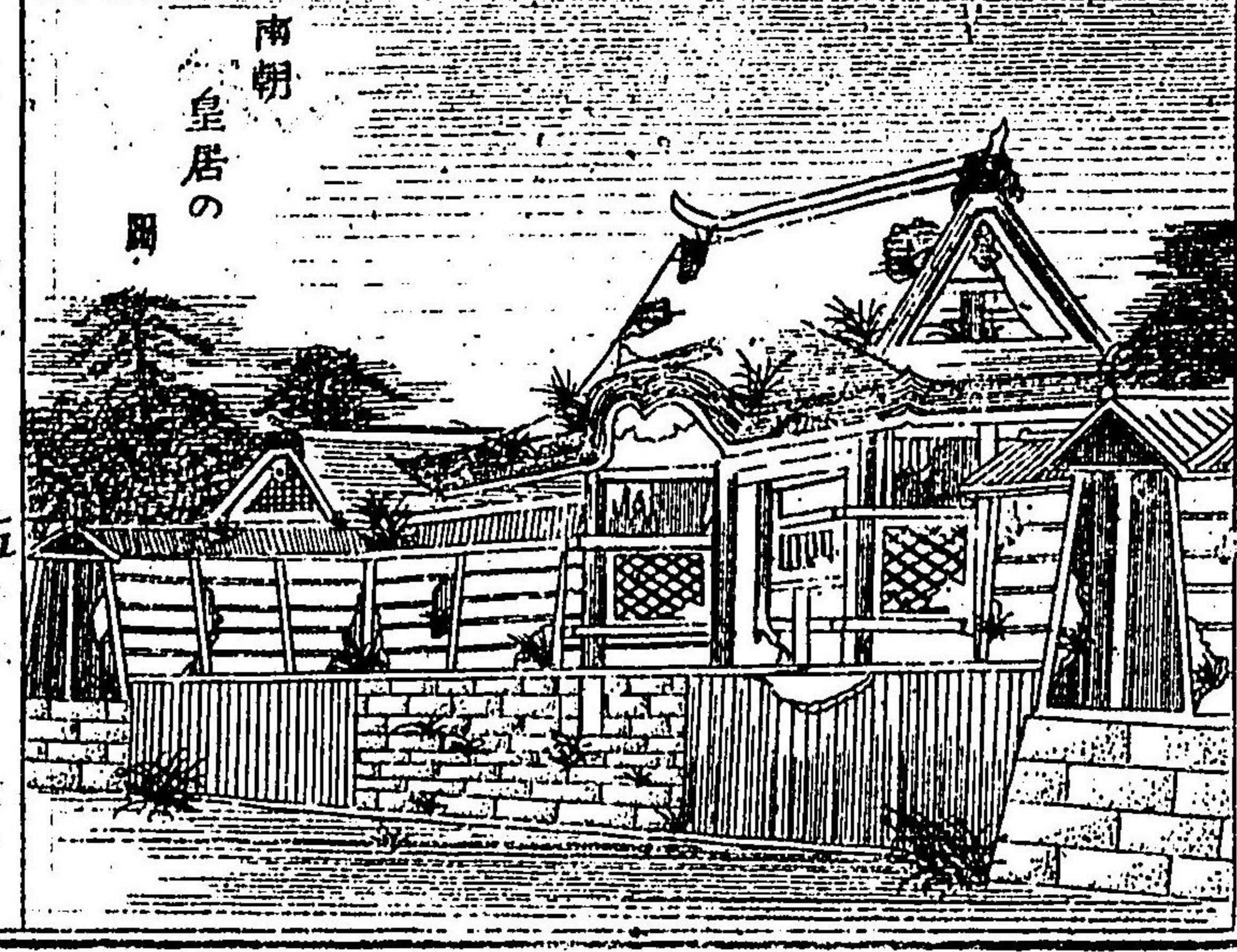
明治めいしの十じゅう有ゆう九く師し走そう初しつの日ひ

浪なみの華はなくまの庵あん南なん窓まどにて

編者識

一休和尚諸國物語

治ち乱らん興こう亡ぼうハ來きた署しよの交まじる相あ往う未みするが如ごとく  
ととりりやや茲こゝにに人ひと皇み九く十じゅう五ご代だい後ご醍たい醐ご天てん皇みの御ご座ざ  
時とき北きた條じょう高たか時とき足あ利り尊そん氏し等らの逆さか臣しん興こうりり屢しばしば々々亂らん  
ををおおしし終つひにに尊そん氏し新しん小せう院いん宣せんをを申まをしし下くだるる光こう明めい  
院いんをを奉ほうじてして實じつ位い不ふ付つ奉ほうりり帝ていの選せん行ぎやうをを催もよほす  
一い休きゅう和わ尚しょう野の小せう潛せん幸きやうありて更さら小せう皇み居いをを經へ營えい  
一い玉たま不ふ是ぜをを南なん朝てうとと云いふ是こゝより皇み統と分ぶん破はす  
てて帝てい南なん御ごのの後ご山さん院いん小せう至し道だう四し世せ五ご十じゅう餘じゆ年ねん  
南なん北きた互たがひ小せう井せい吞とんの勢せいををああり玉たま不ふとと重かさねととしし楠なん  
氏しのの一いっ族しやく命めいをを授あづかりてしてより南なん朝てうとと日ひ々々衰すい  
敗く小せうぞぞ及およびびたる斯ごとく人ひと皇み百ひゃく一いち代だいの帝てい後ご小せう  
拾しゅう院いん此こゝとと申まをしし奉ほうるる後ご圓えん融じゆう院いんの皇み子し小せう  
通つう陽やう門もん院いんとと申まをしし奉ほうるる内ない大だい臣しん藤とう原げんの公こう忠ちゆう公こう  
の御ご小せう女によ小せうてて渡わたららとと玉たま不ふ然ぜんるる小せう帝てい聖せい德とく天てん



南朝 皇居の



小跡一地小則り玉威四海を光ら朝憲正  
 一始めて四海大平の御世とておれり於是  
 帝南北兩朝の人民久しく干戈は苦しめる  
 を衰憐み玉の御和睦ありて至治の恩澤を  
 蒙らしめんとの被應ふて明德三年九月廿  
 五日大内左京權大夫義弘を便として吉野  
 へ御和平の御遣はさるるやめて御和平  
 の儀調ひ同年閏十月二日南都小遷幸の  
 りて嵯峨大覚寺へ入たまへば過し建武の  
 頃より早晩か堅運開け再び聖代小徴し玉  
 ふべきやと世々の帝宸襟を賜し玉ひし  
 今も枕頭一片の御夢とありて先帝の被應  
 を継おせ玉ざるを御恨おきし有ぬ共  
 微運の御身お水空しく邊鄙は朽果玉を  
 んより都近く還幸在りてそ遙まさら玉

南帝 京都へ 御遷幸 の圖



へりと書悦の被應斜かり吉野の皇居小  
 隨ひ奉り公卿后妃の方々も聖代小徴し  
 玉もざる哀を歎き玉へども年頃悉く思  
 都の教り小唄り玉ひて昔の色をを願し  
 玉ひる

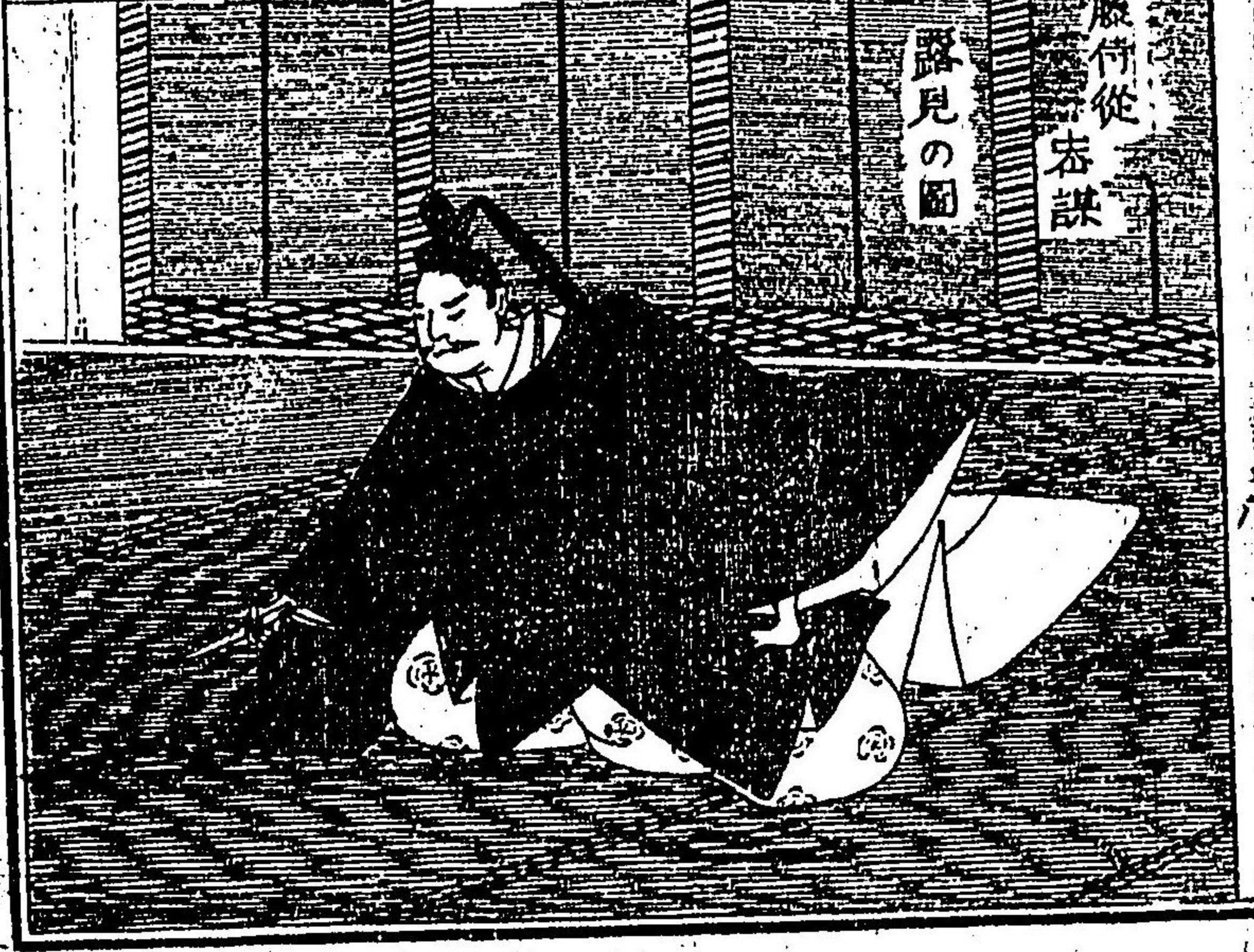
其下

借て其後勅命ありて南朝小隨ひ奉り人  
 々も各々旧官を授け朝位小つし玉へむ  
 諸官其聖徳小かびと敢て異志を抱くもの  
 とおく各々忠勤を堪えむげみたる程小南帝  
 大覚寺小懸坐あると虫ども今迄朝暮参集  
 の諸卿も朝事小違おくして参殿をかり従  
 ひ奉る者として兩三の待臣四五の宮嬪のみ  
 是迎し朕の不徳のかずおかりと被應を宥  
 先も水残り宮嬪も御暇賜せり小倉の  
 麓も幽かる御庵を結ばせ玉ひ世戀を觀し





て只首小後世の供福をぞ願ひ玉ひたる然  
 小暇賜り宮嬪の中小藤待従として右馬の  
 頭藤原の頭純の女子小しておませし  
 倉の皇居の寂莫がるを見る小付聞し小付  
 て此哀感悲痛の情小堪へば情小思ふ假  
 令へ御知平ありとし正しく皇統を継ぎ玉  
 小御身ふれバ太上法皇の御位小も備へさ  
 せ玉ふべき小西三の待臣と山麓の閑居小  
 傍せ玉ふま堪痛まりたる見よく一  
 計を施し玉座小咫尺夫小在す先帝の神  
 冥をも宥め代々の忠臣地下の鮮望をも慰  
 むべしと志堅固小定め其便宜を待ち居た  
 りり主上の御母通陽門院の女房一人關  
 として同院實世御徒従をすめて其数小入  
 小しむ徒従還りか打悦び日頃の本懐を  
 遂るも此の時かり程まさき會を窺ひ居る



崩し其年の三月半を門院教母の女房と  
 李花の御宴を遊むされたるが徒従も御宴  
 の席ふつふかり管絃を奏し和歌を奉り雅  
 興を添へ玉ひりむ主上御感射さすい四  
 更小到て深宮小還御し玉小門院小も待従  
 小斯る異心の何る事を知り玉小其夜主  
 上の侍従を幸し玉ひり状すも密小聞あせ  
 玉ひ後宮小薦めて嬪御の教少加へ玉ひぬ  
 是小由りて始めて後宮小入事を得て今  
 一曰も猶豫なく事を行ふべしと一夜人静  
 まりて後寮で設置すると首を携へ密小寝  
 殿の程近く伺ひ寄りて宮中俄小人音頻ふ  
 水も折あけし闈房へ寄りぬ  
 貴久唐龜生の詠  
 此時主上寝殿小入らせ玉ひり天女傳  
 士安部の安信天文を見る小一條の陰氣紫

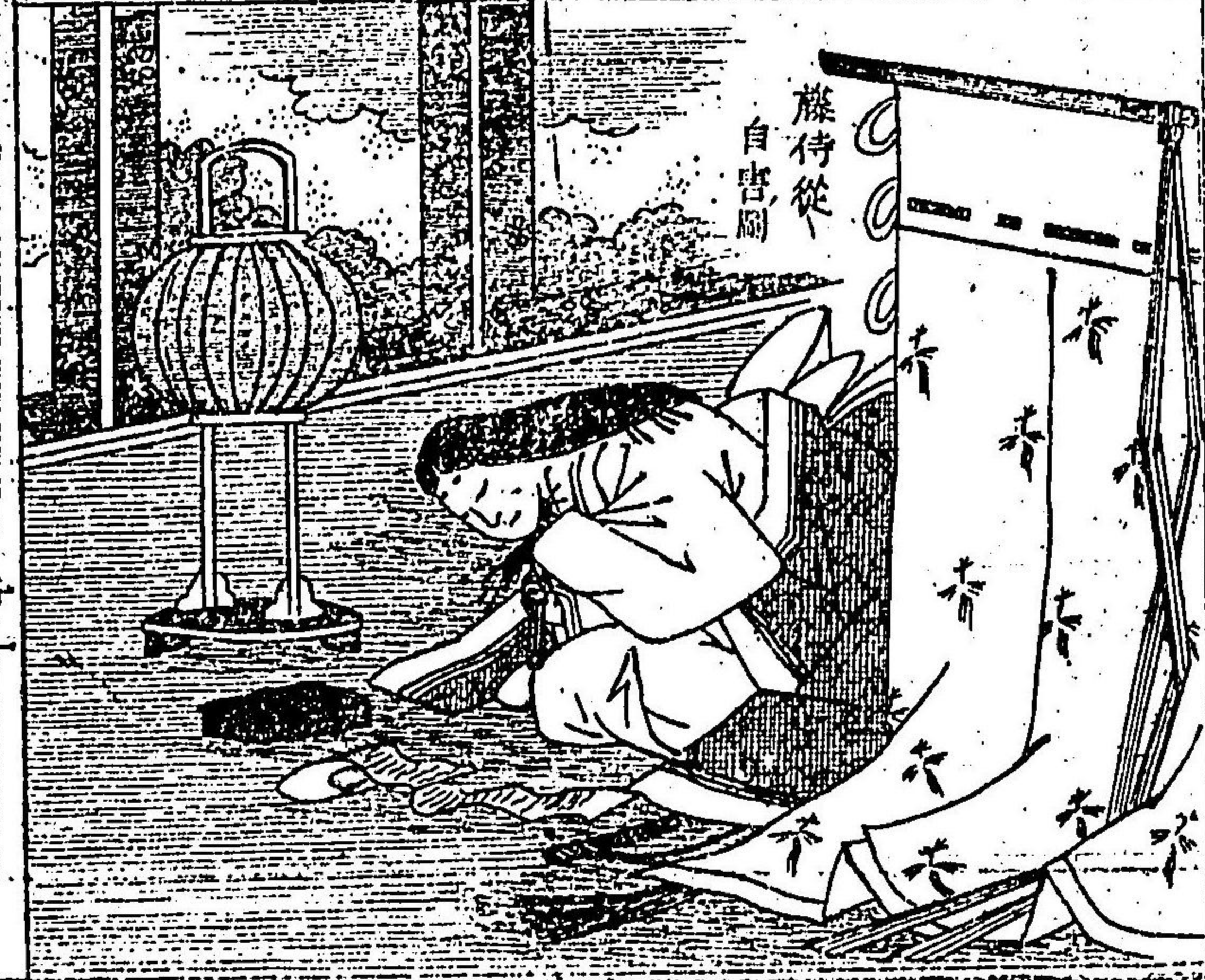




貴久磨誕生  
の圖



のりといふも養小南帝の恩幸を受たる時  
 ものりといふも胎を受けて心地常かぬを誓  
 く其事を止まり一が月満て一玉子を誕  
 ず然れ共其身いやしきをいと深く秘し  
 て世小洩さざれば是れ時不慮永元年正月  
 十八日の事小てあり一母君即ち藤の侍  
 従小も最早や至尊の御胤をまつ、  
 分晩一奉る上を有りて甲斐なき成身の  
 上と覚悟をささめ玉ひ一日看病の人々  
 の透を伺ひ思ふ所を、書を残し置と  
 首ふて喉を思ふま、小突つたぬき夜半  
 の嵐と消失と玉ひぬ呼々其烈尊むべし  
 亦悲しむべし斯くて侍従ハ病死の趣き  
 小比露か、厚く之水を葬り産所の男児  
 正しく南朝の御裔なりと虫ども主上  
 の賢慮を累さん最かしてたれむ之を



藤侍従  
自害圖

十  
 蔽の帝座を犯す事急あり正しく後宮小  
 異志を抱くものありとの羨聞小大  
 め小驚き玉ひ宿直の諸卿小勅命有りて  
 後宮を捜さしめ玉ふ小藤侍従と首を懐  
 小せりむむ枝慮怪し思て其故を親  
 小勅問有りし侍従少しも畏れ先帝  
 為小恨みを報ひ奉るべき志の趣きを勅  
 者以主上其志を御感あり今皇統一小帰  
 して先朝の旧臣と強し朕の爲小忠志を  
 尽す時小当り独先朝も忘れ朕を犯さ  
 んとするの志世々の弄史小も未ぬのセ  
 ざるの烈婦其罪を宥して忠儀を勵まひ  
 べしと直小洞院實世卿小云々の次第を  
 宣旨有りて下賜ひりぐむ実世卿を始  
 め諸官の面々仁徳の廣大あるを感激セ  
 めたかありき其後侍従ハ蓬髮の思立



秘して育てられし小洞院実世卿の  
 同僚藤原の朝臣爲貞卿の第二の男子生  
 産ありし月をへずして世を去り玉ふ  
 幸ひ小松小云々の縁故を告げ送り  
 れハ爲貞卿大い悦び玉ひ貴久磨と名  
 づけ玉ふて愛しみ養育し玉ふ是れ後小  
 一休禪師と云ふ高德の大和尚とあら  
 る人なり

貴久磨出家の話  
 梅樹と二葉小て馨し聖人の生れあひら  
 小して之れを知るとあや去る程小貴久  
 磨七歳年長する小随ひ聰明宏力小  
 て遙小群児の上小出で讀書文辞を玩  
 の外自餘の遊戯小心を留めず八歳の時  
 父の御紫野の真珠庵養父禪師と法味を談  
 せられしを歴々側小て聞き天然の機



貴久磨

菩提心を

起して

紫野

至る

圖

浩相應する所や何りたる禪師小從ひ僧とあらん事を講ふと重共父卿是を免し玉ふ  
 由りて一夜窓小家を抜出て真珠庵小到り自ら禪師小志の趣きを述べ禪師大い  
 悦び遂小庵中小止め置て爲貞卿小講ひ受けて諱を宗純と改めて難僧とよまれぬ

編者曰く以上第二回より宗純と云ふ小僧小あはる、迄の事実ハ慈亮著述の「一休傳」に見へる  
 亦編者曰く是より以下往々問答の文有り其か中狂句或も狂詩等散在せるし元來詩歌  
 且皆小禪機の奥義を解するもの小て其意廣大なるもの小ハ假り小大要は摘解し置め  
 るも問々錯語かき小あはる、編者の至るるあり看官之を想せよ

水心宗純は資性穎敏小して未だ三年を過ぎる小経論祖師の語録等大半誦み得た  
 るのみならず禪機口戈人の目眩驚かひ事しむくかりしが師もいとく之を悦び玉  
 ひ種々の問答をかき小其答殆水の流るゝ如くかる程小庵小出入する竹齊と云ふ  
 者いり小して一度困らせてんとて一日「紫野丹波小迦」と五言小二つの地名二つ  
 の色字を聯ねたる難句をのけし小宗純声小應じて「百河黒谷隣」と次しが竹齊其一句  
 小言ひ伏られ詞かくして逃れ帰れり此人幼小して妙才あり唯人かふげと皆舌を小  
 るいとかん

宗純幼小して頓玄ある話

又或時竹齊と云者器小封を附け上小有る無の記したるを養父師小参らひとて持来



り宗純を頼み遣え何と問ふ小有無の二つを本是一つと答ふ然らぬ数も何個ぞ七つ八つと答ふ其も違ふたり梨十五個ありと云ふ小宗純七つ八つを合せば十五からびやと答ふ

一言の葉小花の作意の七つ八つあをいわれらむいひのひもあ  
と云ふて禪師諸共手を打て笑ひけり○亦或時禪師粘を壺より出して喰ひ居るを  
宗純見付其も何ぞと云故汝が如き小僧少くても食ふ時を忽ち死するありと云ふ  
て取置れたり宗純師の出らるゝを待壺を取出しさま小棚より取落し微塵ふかひ先  
づ二三杯食ひたる処へ師も帰られん水ハ宗純のみふと泣く師何事ぞと問ふ小師  
の大事の粘壺を打破り故申訳なき小粘を喰ふて死ふんと思ひ候へ共今小死ぬ申  
さびと云ふ小師も言葉かく打笑ひてぞおわたり斯て宗純十五文小及び師の  
毎夜寒疾ひの養として干鮭を食するを見て宗純魚鳥を食するハ佛の戒ある小道の  
物を食ひて妨げなくハ純も分ち下さるべいと云ふ師貧道を先づ引導して用る故  
妨おいと云れん水ハ宗純然らば引導を聞んと云ふ小師鮭に向ひ

「汝元来枯木の如く活とせ水共後ハ水中小遊ふ事能はばあや悪僧小喰も水て仏泉を得よ  
と云て喰もる小宗純明朝起立て早々一匹の鯉を買ひ来り味噌汁の中へ切込ん  
とするを他の小僧共見て斯と師小告た水ハ師立出声をもげま宗純汝仏戒を破



て活魚を殺す一いつ何ふむ許さん言得ず  
一棒の下小頭腦を碎りんと云れ小  
宗純懼れたる色かく鯉小向ひ  
汝元来生木の如く活さんとす水ハ逃  
げんとし後ハ水中小遊むんより去り  
小悪僧小喰も水て尿とかれ喝  
と云ふ小宗純小押當てぐさぐさと沸へた  
る汁の中へ切り込しハ師杖を投擲て  
善き引導ありのあ前夜の干鮭も尿とか  
り今日の鯉も仏泉を得べきぞと責ら水  
いと埃

宗純跡を一体とよぶ話  
或時宗純便小行んとせし小駈小空樓曇  
り雷怖しく震ひ今ふも雨の降り来る景  
色小宗純兩具もかく行のんと成を師を  
引止め兩具を持って行と云れりハ宗純ハ



有瀬路より無瀬路へ帰る一休

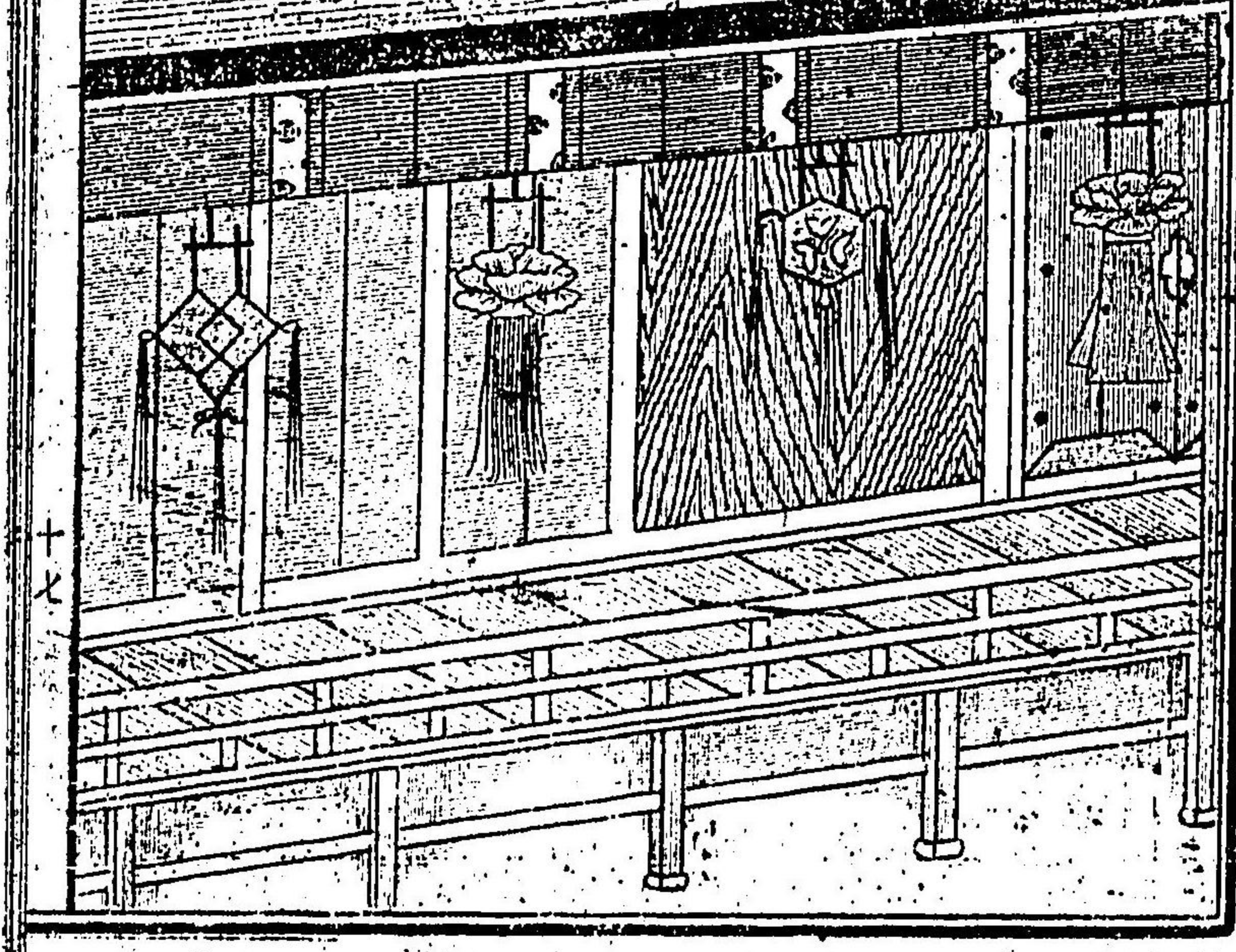
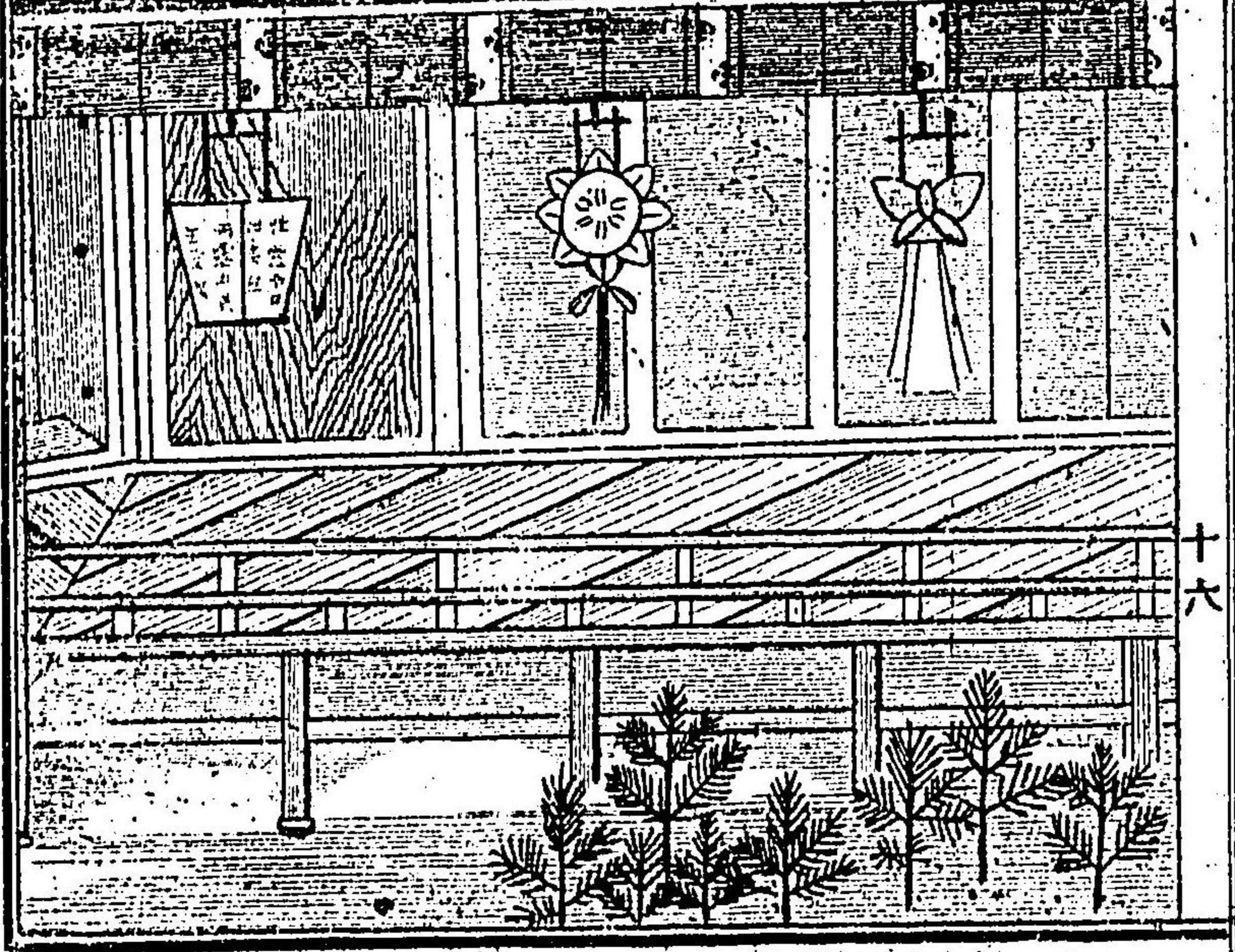
と口駭めを禪師大い小悦び汝程の心  
ゆふに雨具の設せざるも理あり今より  
辨を一体といへばと許さる側小あり  
もの一体小向ひ歌の業を問ふ小人間の  
此後幾も有問ももづりて一体の内  
の事か此ハ雨のふりても風の吹ても  
まわりらぬとの事ぢや

一休紫野大徳寺真珠庵

斯て許すの歳月をへて登壇禪師老病小  
て遷化あり一時預命して一体を法別と  
定めらる一山の僧侶一体の宏才を知ら  
ぬものかありしハ曾て擬議を抱くも  
のかく大小事をさかりて有りが其頃の

時の風として毎年七月十四日小を浴中  
の諸寺諸山より大内へ性灵の供養とて  
燈籠を奉る慣例ありしが殊小巧み小美  
あると争ふて奉る事とかり今年ハ當院  
も如何ある者を造らんと評議まぢく  
あるを一体進み出で今年を残小任すハ  
寸どの事小一同安心して居る内最早  
其日小もかりたれハ一休和尚自作の最  
見ぐるしき物を持出で玉へハ皆々大い  
小驚きたれども今更詮方もかきま、持  
行て懸け置とる小和尚一首の狂詩を書  
付置れたり

性靈今日出来迎 兩露直供萬葉棚  
桃得燈明天上月 柏風流水讀經声





横死引導の節  
 斯て一体和尚ハ活仏かりと云もてや  
 以其中小増て引導を乞ふも教養く一年  
 夏頃濃雲契を蓋く蒸落日を重盆を傾  
 くお如き大雨ありて鴨川の水満まり  
 俄小大水とる川添の家も壁て柱  
 ちるまり旧家たさふ致て激流小  
 押流る、杖を見物せんと罵り合ひ川岸  
 小舟も其中小二十歳むりりの女同士三  
 人小と見物して居りしが何と十人  
 一人の女川岸俄小崩れ逆巻浪小落込  
 小ぢあふやと云問小押流され鉢も見へ  
 びかりしハ残る二人の女共大心小驚  
 き斯と其親共小告げれば周章ふとめさ  
 川岸小緋いて尋ね出せしが最早事切て  
 有しわハ兩親の歎き一方から併し常



終小是の事較聞小達し御感斜か少し直  
 示下りて明年より其事止め或る人其事  
 をぎ、一体和尚の意斯あらん小て必  
 庭中小て性霊會を何るまじと尋行て一  
 体小問ひけれ和尙云れける小て否々  
 我ハ俗と事變り三界の衆生有縁無縁を  
 祭る故最手濟かる性灵祭ふて候と云る  
 る故然らば拵みこいと云ふ小最易き夏  
 かりいぎ参られよと先小立ち行ある、  
 小て何処のと思へむ鴨川の遣り追連丸  
 行一圓の圓を指して是かり見られよと  
 云る、小て一向小意つりぬむ何処ふて  
 候哉と云む然らば御目小懸申さんとして  
 山城の瓜や茄子を其俣小  
 午向とふれや鴨川のみり  
 と口彌み玉へむ皆々手を打て笑いと云





業と云乍ら不便の横死の夏ふれは末  
 末も定めて覚束かと思ふ故可然名僧  
 の引導を願ふと語る折ふ一体和尚  
 通り撫られは是幸ひと右の趣きを速  
 て願ひたれば和尚不便と思ふ然ら  
 引導して遺さんと彼の死屍を以前小落  
 入川岸小運させ  
 川船をとめて途瀬の波枕浮世の夢を  
 見習まの驚めぬ身の果かさよ  
 と語の文句を二三遍くりのへり賜へて  
 屍の襟元を取りて川中へさんぶと投  
 て見返りもせし歸られれば跡ふて皆  
 々一体和尚も氣でも狂ひさるからんと  
 早々取上げ外の法師を願み引導して埋  
 しか其夜より妻子共さまぐ小まかさ  
 夢みたるも一体の御引導ふて誠小善さ

心へ浮みよきふか上人の引導ふて  
 引戻さ此中有的族小迷ふとりと夜かく  
 夢み果て立頭ふ小ぞ今を始めて  
 妻子共口悔か一休和尚の庵ふきとり  
 て斯と歎くか和尚不便と思ふ此やの  
 持て亦埋死骸を掘出させ以前の川岸小  
 持せ行

大水のさき小流る、とちのらも  
 身を捨ててそ浮ぶ瀬もあり  
 と口彌玉へ川へ投込歸らぬる小其夜  
 親子の夢小ほりかとき御引導ふて今て  
 そ浮みとりと云ふて白雲小打のり西の  
 空へ行けぬ人々大ぬ小悦しとちん  
 大俗引導の語  
 江州堅田の彌小彌五郎と云ふ船頭一人  
 ありたるをのぶ業かから賤いとさみふや



一休和尚  
 水の圖  
 國丸  
 里をいの小と  
 人ともい  
 木らみ  
 無為の  
 物とことへよ



やつ水て一生のま穂の襖輝の枕をそむとて真の道にうとくして心ざささうら  
 辰の九重の花ふあそふ草ふも逆の分りおのづから賤しき小憤て羨むるべし度き  
 歸らば願ふ小尊きかへを恥て止ざりたれバ最浅間敷ふすがかりたるが遂小身ま  
 りりて死ふなる妻子いいかなく事かきりかく儲あるべきふあらざれば火ふやせ  
 ん主いや埋んと悲みたるせめていりかる知識をも頼みて後世のくかんを助たきと  
 思ふ折らら一休風雲の行衛思一めて浦の方ふまよりめて四方の致景を乘みてお  
 ちします処ふ妻子こ水を見て衣のすそふすがり只今かやうの浅間敷もの、相果て  
 候のあも水御いをされて彼の者の後世のくるしみを導きて玉をぬるし生々の厚  
 恩ふて候べしとのなしみたる一休ふびん思一めい何より安き事かり引導さづけて  
 得とせんとて此家ふきとり玉ひ藤一玉ふ横こそふくんか死人を米俵ふつめよ  
 とて俵ふ入て繩をりけ九太松ふのきのと湖水の波ふうりべ沖ふ至りて声をあげて  
 高らふ小宜ふ小  
 此俵を米元來米俵ふもあらび豆俵ふもあらび汝をかとの彌五郎  
 俵ふり江河ふ沈で鱗の餌とかり仏果を得よ囃との玉ひ水の底ふぞ  
 つき入たる是成仏の引導ふり

一休和尚元日は體を舞へる話

正月元日より三ヶ日の間ハ一天四海賢きも愚かも愁あるも愁なきも貴きも賤しき  
 も屠蘇白散は茶麩渡ふりとも鬚一附け御鏡すはると尻餅ふりとも搗きて悦ぶよ一  
 休和尚ハ元且早朝墓原へ行きき體を取ら杖へ貫き浴中を御用心くんとて門口  
 をのぞめ歩かれければ人々思ひ思ひ跡まで油石灰塙門口ふと洗ひ清居居  
 り一が或人立出て一休は向ひ御用心と云至極の事まで斯様は美を尽しても早晩  
 此の體の如くなるものふれ共世の習とて今日ハ皆く悦びあへる處へ斯るむく  
 つけまき事ハ御遠いふすやと云ふは和尚否く我はいこひて此ものを出ふり夫  
 れ目出度と云ふ事ハ 天照太神より起ると虽も是體より外は目の出なるものふ  
 一とて

よくげなき此されかうべあなかし目出たかくかしくこれよりいなし  
 是見玉へ人々目の出たる穴のこのこりし目出たしといふなるを皆人今日とく  
 りして飛鳥川淵瀨つねならぬ世なりとは夢まもしらぬゆへ今よも斯くなるぞと御  
 用心くと申なりと云はれけるとなり

一休掛物は贅をせらるゝ話  
 其頃土佐守とて晝の名人ありしが或人晝を頼とま行し土佐氏いたく酒は酔て前



后もしちで居られしを強て頼しかた是非なく筆をとりくるくどまわし刷毛もて波の状の線を引き渡されれば持歸り見れ共何とも別り兼ねるも或日土佐氏も尋ねしかと醉中の事よてしらす云るゝは詮もなくしてありしが之れを一休和尚は持行き賛を乞はばやと心付和尚の庵は末り頼みければ和尚熱くと御覽じて之れは何とも別らぬどのそなれば賛して遺さんとして

水中一物ありその一物を問へい書をし書工もしちす持主もしちす賛する我猶しちす

と遊しければおれを見る人聞く人かよこも直なる御心あやとて無二の掛物となりて今よ於て傳りあるとなん



一休和尚章契好物ノ話

和尚ハ蛸が御好物よて或日徒然のなぐさよる蛸を買は遣はされしかあまり使の遅

と遊しける巡へ蛸四五たい持来りければ一休悦び玉ひ此蛸むざく食尤も無殘

なりいで引導して食さんとして 干手觀音蛸手琴 斬懸抽酢拜如何 佐州一味天然別 他禁戒任老釈迦

とて抽酢をかけて大ひも食ひ去る檀方へ行き酒肴分まいられければ吐逆なされけるを人々見れば皆蛸なれば大ひも驚き和尚ハ生佛の様と思ひしも蛸をまいりしか切てなまぐさ坊やとあざけり笑ふを聞玉ひ否やく我ハ蛸を食ひし事なしと云ハるゝゆへ人々現は蛸を吐き置ながらありが玉かと云へば我ハ口より出たりとも食たることなしされば其食さる証標を見せんと皆なく引連ぬ百万遍へ連れ行善導法然の畫像を見せあれ見玉へ人々善導口より阿彌陀を食ひしとなければ共口より三尊出玉へり善導さへ食さざるもの口より出る制し難しまして愚僧の如き食さざる蛸の出る事せん方なしと云されければ皆人々其頓智を驚きけり

一休和尚の食れし魚水中は吐出し生る話



初和尚ハ生佛よてをこすれバ魚を食して  
水中ハ吐き出し玉へバ魚忽ち元の如く生  
るとて浴中の者専ら云い合へり或時和尚  
聞かじめし浴中の辻々ハ高札を揚られけ  
る其詞は

来る何月の日さかり枯のほとり紫野は  
於て魚を食ひて其儘もとの魚は吐き出  
し水沖まをどらしむる事なり御望の方  
々御見物は御出待奉る

大夫ハ天下老和尚 一休大禪師  
と書れけれバ浴中の人々は是れを見て扱ハ  
人々の云ひしは遠く斯く自筆よて書る  
上ハ偽りなし見物せんと其日よも  
りぬれバ庵の景内所せき追詰かけたり和  
尚時分ハよしと大鹽よ水を盛り出さしめ  
其前ハ魚を料理して御前を出さしめな



此様ハ  
見事ハ  
行ませ

く食ひ玉ひ馳て大鹽よ向ひ喝々との玉ひしたし目ごとじて居られしが見物の  
者ハ今や生きたる魚を吐かれぬかど和尚の顔をじつと打守り居たるが和尚申され  
けるハ各方ハるく御出下され一き見事ハ吐出し御覽に入れ度存すれども  
中々今日尤吐かれ申せぬハ是非及ばず屎となりとも致し申さんさらたて奥へ  
入り玉へバ皆なく聞しは優るをどけ御坊のなとて立去る其が中よものりたる人  
ありて云ひけるハ只今参りたる魚ハ皆淵まをどるなり有難き一言や邪誠は正法よ  
ふしぎなしと受玉丸りしよ人の余りほめんが為めなき事をいふにそしるは當る  
ゆへ其理を示し玉ふ有がたしくと云へバ人々夫ハ心付大ひは感しあへり

大俗問答の話

或時和尚の僕思ひけるハ和尚ハ智識者とて名高き諸方の人の尋ね来るを聞けバ皆  
なく二口三口の問答のとなりいで我も問て見んと或日和尚よ向ひ男と申すもの  
ハ生れ出ると珍寶といふものを以て居りますか成人して落す人ハ如何と申けれバ  
まだ言ハも終らざるよ金玉といへども黒きが如し

一休和尚追劔せらるゝ話

和尚一年大晦日よ至りし下僕申やう明日ハ元日なるよ米一合もなく錢一文もな  
し如何せまじと歎きけれバ和尚聞玉ひ夫れバ歎くまじいざ出でまの玉ひ自ら一捧



ふりうたげ山家路として出玉ひ折ふん土  
 雷賣り通りかへりけぬバ遁すまじとて和  
 尚棒打ふり追懸けぬしかた其土器を打  
 捨て逃げたるを僕も持たせ歸り賣代なし  
 て元日の賄とせられしかたからずも大名  
 果られしとて引導を頼と来るも和尚否々  
 錢を呉ぬすバ行まじとの玉へバ最易き事  
 なり何程御入用あると問へバ一貫八文と  
 云われし早速持来ぬバ和尚彼の土器賣  
 の春は錢一貫八文を入札を立ちぬける  
 先月大晦日の夜の土器の代一貫八文値  
 し一物も付一錢宛帳けし玉へと書付け傍  
 貪の賊とて倫盜界は非ず如何となれば  
 戀の歌も邪淫界は非る証據あり慈鎮和  
 尚と云貴き無りの讀る歌よ  
 まかこいこ松をしぐぬれませめかねて



此圖と出来ぬ

まくづが原は願さこぐなり  
 と侍りけむとかや然れを邪淫界を破りたる人々と九言がたし我も貪の盗となれば  
 倫盜界を破りたとて言れまじきなりと書かねけるとかや偕て大名の引導又出玉ひ  
 出く

人ハ六道の錢とて六文出せ汝ハ引導とて一貫八文出す三進が一十さぬ汝ハ人ハ  
 一貫二文優れり十方は道あり行たい所へつゝと行け成佛正ようたかいなし是如  
 何とならば有地獄の沙汰も錢がする  
 どの玉へハ皆人扱もまどけ人かやとて感せぬ人ハなかりけり

休和尚比叡山まで揮毫の話

和尚ある時比叡山に登り堂社を拜り廻り居られたるを山法師ども是れを聞き一休  
 老かくれなき能唇なれば良き幸ひと皆なく硯紙を持来り頼むもぞ和尚望とみ任  
 せ唇き與へ居りぬしが山法師どもよこ讀かたき事爰かりしが今度ハ一山の法師共  
 より集り和尚も申しけるハ何卒大文字まで如何も讀も易きものを書きて賜はれ  
 と云ふも和尚さち紙をつぎ多く墨をするべしとの玉へハ畏りぬとて一山の法師  
 共ひたもの紙を長くつゞ程は叡山の金堂の前より坂本まで長々しくも引のたしけ  
 るもぞ駈て古へ大師の御筆とて七八尺なるを持来れば和尚九彼の筆は墨たつぶり



含ませへたと紙へ付一さんかけて不動坂まで一筋引かけて讀るか法師たちとのたまへば何とも讀めずと云ふ又墨含ませ不動坂より坂本まで一筋引つゝ讀めるか法師讀めるか法師との玉へ皆なく呆れ讀めず答へければ和尚長々と書き讀め易きハ即ち是れにていろはのあさきのくだりあるの字なりとの玉へた人々興きさまし一度吐と笑ひしとなり山法師も望し事なれ九いやともいせぬ御作意と感じ今に至る迄此の字比叡山の寶物となり居れりとぞ

和尚陰門を三拜し玉ふ話

或時和尚田舎の川辺を通り玉ふ女の陰門を願し洗濯して居るを見玉ひ陰門をめざし三拜して行玉ふ人々見て切もあの僧狂氣か出家の身として女裸なるを見たり三拜して行かるいん不思議なり何か仔細も候いと物賢き男一人和尚を追掛り袖を引き御坊只今女の陰門を見て三拜し玉ふ何故ならん聞かまほしく候と云ひければ和尚の申されけるん

女を法の御くりと云ふさげん釈迦も達人もひよくと生

と云ひ捨て通り玉ふ跡まで一休和尚なることを聞き實は世の中の坊主と運ひ和尚の心根の直なる即知を感ぜあへり

一休和尚諸侯の招は應ずる話

斯くて師の道徳年を徑て益々聞へ高く伏して禪教を受る僧數多なりし其頃横津國は居城有り諸侯某公深く佛理を信して高僧の名を聞て毎千里を遠とせしめて使を差向けて招待せられけるん于慈其頃京都に於て有名なる一休師を一度招やと或日使者以て言ひ送らるん折かし和尚佛事運かふし不日此方より推參を遂るとして使を返し遺四五日を経て故を麻の衣の垢つゝるん穿三衣袋杖笠の外ハ携ふる事なく只一人彼方は趣ある又彼の諸侯ハ名高き名僧の遠來なれとて容館の設け最嚴重に美を尽し侍ち居られし案よ違ひく宛も僧の行脚の状なるが一休召し隨ひ推參仕りぬと云入れらるんぞ切ては只るらぬ禮僧らんと懸て容館は請





し入れ最町噂は寒温の挨拶も終ると先づ佛理の談及を兼て秘蔵の牧溪が昼  
 し靈照女の掛物替を乞れければ和尚一凝及バ筆を取りて  
 「汝が親の笈作り馬祖は斯され不賣を海に投る阿雁居士が娘  
 と書れしかば彼の侯讚嘆有りて今一つとして此度ハ大黒布袋の二幅を出さる師重て  
 筆を揮て

大黒尊天其回懸 諸人信仰置棚陰 平生愛鼠是何事 足下水俵無用心

又 菩提 煩悩 睡裏 乾坤 寤寐 恒一 佛無 虚言

と書き尋り筆を投げ愚僧既君の需りを果せりいざ罷らんと座を立退るんとし  
 王ふ故侯遠しく衣の袖を援うへ某の師を乞ひしハ何ぞの一事のみならず願く  
 悟道の一向を聞ふんと有りければ和尚天を仰て口を開き地を見て口を開き王ふ  
 侯凝議して覺らす又問を重ね王へハ和尚筆を執りて  
 我ハ唯後世の教へを知らぬなりアウンの二字のゆるまらせて  
 と記さければ侯即座を悟つて再拜せらる隙に衣の袖を拂て館を馳け出し足  
 任せて道を急ぎ王ふ淀川の三十石を乗りて降りんとて飛乗り王ふ折ふし乗り合  
 ひは山伏有りしと和尚と色々問答の末彼の山伏申しけるハ我ハ法力を以て

不動の像を祈り出すべし貴僧も一奇特を顯し王へとて艇に立出で一心に祈りけ  
 れバ乗合ひの人々興有る事の出て来りぬ眼目もふらさ息を止め見居りしと不  
 ぎちるるる不動の形像忽然として顯さ火焰則り輝きしハ皆なく感は堪へ  
 暫く鳴止りさざりけり此時和尚ハ吃と見ていぞ我奇特を見んは愚僧を別業  
 を設け彼の像の消へぬ様を祈り王へとて自ら不動尊の前に至り小便を仕りけら  
 れしが山伏の法方尽き忽ち消へて無くなれを皆人一休を禮拜して奇異の思ひを  
 なしける是れ正法の大徳は邪法を行ふ克ざるなり扱て夫より陸より上りなるは擯  
 牛はひとしき大犬見鳴きぬ旅人を見て吠へ吼りぬ此時山伏皆なくは向先程の法  
 力競へ負けるるは今度法力を以て彼の犬をなづけ見せんとて聽て殊数押揉み  
 汗衣を浸して祈るは犬益々異しむ愈々猛り吼るるを又和尚立出で王ひ突ま  
 がり山伏を押しつけ懐より握り飯一つをとり出しくると呼び王へハ犬忽ち吠  
 へ止ぬ山伏二度の後きも慙びて群居る人を押し分け逃げ去りけり跡に諸人知  
 尚の名法を感し名を問へた我は紫野にて一休と言ふものなり火を消すに水を以て  
 し犬を馴るるは夜を以する何ぞ奇とするに足らんとて立帰り王ひぬ

庚申堂の猿の話

和尚甲申堂の前を過ぎり王ふ時三ツの猿一つハ口をぬき一つハ耳を手で押へ



今一つハ口をぬさぐ和尚之れを見て打う  
 るづき笑ひて過き行玉ふを三人の若者見  
 イ色々と案ずれども一向に合点が行ぬや  
 へ和尚を迫り申けるハ貴僧只今甲申堂  
 の三正の猿をみて打うるづき玉ひしが定  
 めて彼の猿の由來御ぞんしされを承りし  
 しと陳べければ  
 何事も見ざる聞きざる言えざることい  
 佛了らざるなりけり  
 と言ふて過き行玉へハ三人のしゆ大ぬ  
 怪りざりぬ是より三人が見ざる聞きざる  
 言えざるの願をさてしが折ふし遠寺の鐘  
 鳴りしりし聞へければ聞きざるの願をい  
 る人何となく思ひ出て  
 今日の日も命の内まくれまけりなすと  
 やまか入相のあはれ



とふるま歌をうらぶさける短き言えざるの願をてある人言ひけるハ其方聞きざるの  
 願の空しくなり事のかかる言へば見ざるの願をてある人の言ひけるハ何と聞き  
 ざる何の言ひて共に大願を破り玉ふ思はる浅ましき事なりきやと言ひし三人の心  
 根最可笑

蝮川新右エ門和尚と問答の話

爰に蝮川新右エ門尉親當とて禪法を身をやつし殆ど其典を知りぬるもの一休和尚  
 の高名をまゝ傳へ來りて和尚の扉を叩き佛法條行の大俗参りて候と言へハ一休  
 や問玉ひて曰く  
 問汝といづくの人ぞ 答曰和尚と同國 問國ハ何事も持らぬり 答鳥ハありく  
 雀ぞちうく 問ていといつまを知る 答紫は流る野邊 問いかんとしてか流  
 けるや 答尾花朝顔紅菖紫蘭 問ちりて后ハいかん 答官城の原 原に何事か  
 侍る 答水流沈々松風風々  
 言哉くはれくと請じ茶を参りせよとて  
 なるまがなるまあらせとくハ思へども達広宗よこ一物もなし

返歌

一物もなきをいふはこころの心はる本來空の妙味なりけり



と言ふて馳て別れを告て立帰りしが蜷川  
ハ聞しは優る道心者なりと感ぜられ是  
りして和尚の友人とてさるりぬ

一休利法を立札せらるる話

其頃都下口痺の妙薬として一子相傳の薬を  
賣る者有り和尚或日尋ね行玉ひて其法を  
聞せるとて頼み主へとも中々に秘法なれ  
バ一子の外は傳へず言を無理は頼み主へ  
バ如く名高き和尚の事なれを不えふふ  
えふふなるがら他は口傳せぬと云ふ起請を  
書て傳授する事極まり馳て和尚傳授を  
受け帰られしが斯る諸人の病を愈する大  
法を秘して置くは慈悲心は非ずとて立札  
して世に知らせ玉ふ一口痺を薬の事とし  
口痺を病をもり有りて密柑の實を黒燒  
して飲べし奇代の大名

導して再び發る事とし

と書付られければ教へたる大なる怒り和尚を尋ね來りいか御坊ハ賣主坊主に  
て破戒無慙の人の那他口傳せぬと云ふ起請を書きながら高札を立て万人に示すと  
て何る曲事ぞやと眞黒は成りて怒るを和尚を自若としてあはれとくの有様や  
な愚僧は口まで傳へぬとの起請を書きし高札を立てと言ふ起請を書ぬれのを  
とそらうそぶいそましくけれるは彼者怒氣方寸はせまりけるま一言のぬけ句は返  
答うをされ帰れり

猿人發心の話

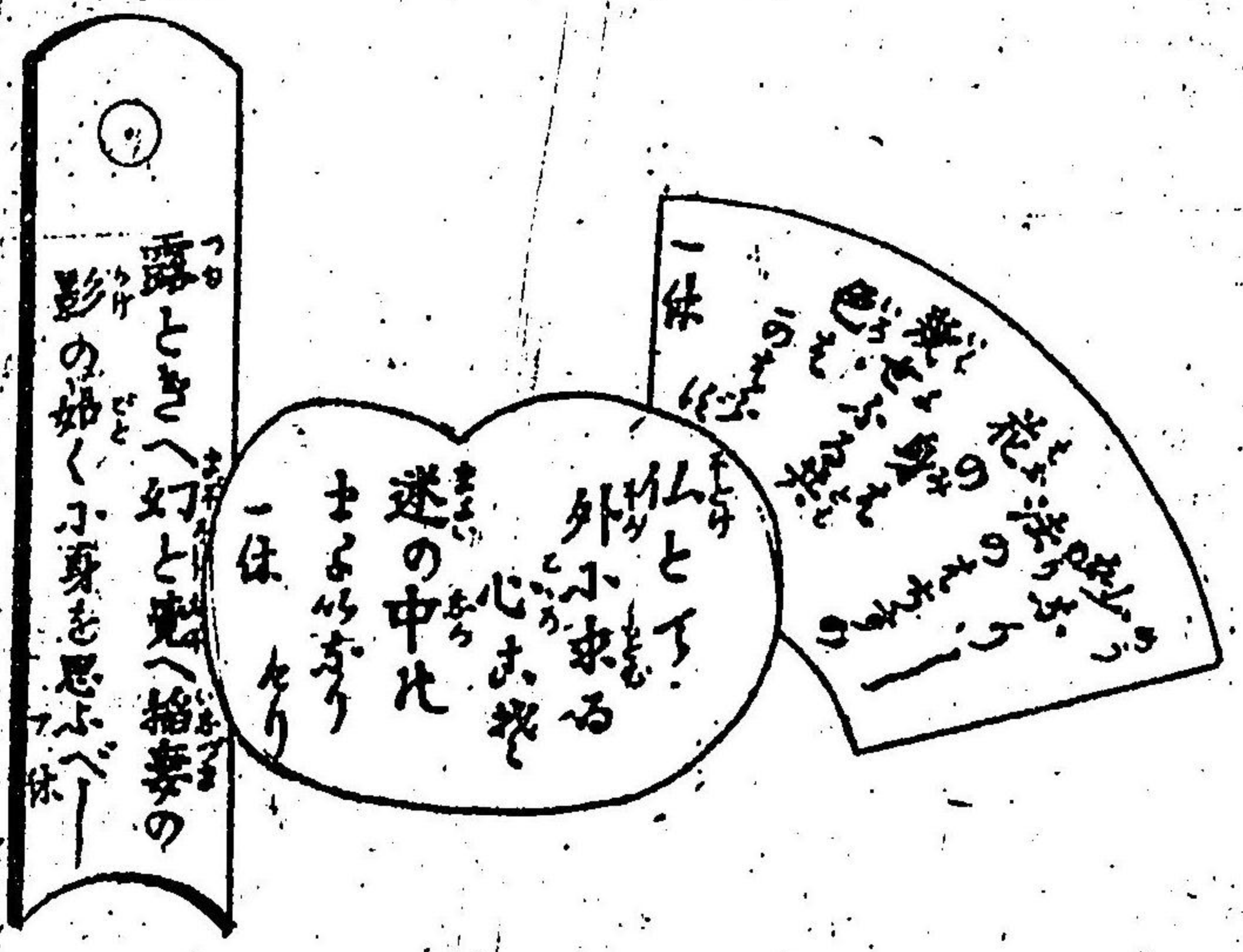
又御雲水のころ駿州富士郡大石寺小知音の僧おますとて尋ね玉ふ小互ふつり  
の思召はむらく足を留め玉へとて少の滞留ありより近村の風俗を樂め寺  
僧の法談ふど玉ふを助講かどあり折あり隣り村小村山と云ふ喜兵衛とて大百  
姓あり常小隙ある身おれむ殺生のみ樂みとせしが庭先の柿木小鳩二羽來りとなり  
しを得たりと鉄鉦とり出し忽ち一羽の鳩をうち落しける小一羽の鳩おどろき飛去  
りしが亦元の枝へきて留りしを亦も玉を込すが同く打落せしがふと一休和尚の  
法談を思ひ出して鳩小三枝の禮ありと聞きしが正しく此鳩ハつがいのはと小一休  
を先小うちや雄を先小取し事やら残りし鳥を元の枝へ來りしも死を共ふせんと





我の玉さきま符一車うさりひち一扱々  
たふも夫婦の約あるものをまれ小人間  
生れながら殺生を好み是まで数々の命  
の命をとる樂と心得一兼因のふとこ  
こそ恐ろしやとて忽ち發心して一休の  
もとへ走り行き若きよりの我の誤りを  
讒悔して御のみそり授け玉へとて其座  
ふて剃髮深衣の身とかり全證居士と法  
号をうけ明くれ念仏三昧入八十有餘  
の年齢をたもち子孫榮るとかり其時  
法名を下さるとして

心よりくぞふりける徳備師  
鬼をささふと佛ささふと  
俗ても因小御をさし申さう鳩と云鳥を  
く小をよむを親子ひとつ木小宿を成  
親鳥のとまりとる枝より三枝下ふる枝



からでを子鳥を宿らず又鳥を反哺の孝ありと云事もあり是も生れてより雛の間親  
鳥を生毓みそとてらるゝの百日の間を親鳥小やしかた水百日小みつれを親と同一  
とかり巢をもちれ餌をひろうより其後百日の間親鳥へ餌をくゝめあへず鳥より依  
て昔より古人の文小も出たるぞの鳥小さへケ獲の禮孝あり人間とうまれて忠孝  
のふとつと大切ふつとむべきの第一かりやいすれハ不孝不忠のもの出来るを神  
も仏もあさみ玉ふて鳥小さへをとるぞと示し玉ふと鳥小をとり玉ふと歌ふ  
そ人小似たりとも人と云れぬぞ必ず忘れ玉ふと古歌ふ

父母小つるふあふぎのかかめらうし  
何事もあやの心小のへさる是こういんの人と云ふふり  
編者曰く余り拙文を以て彼和尚の一字の状を長いものを書まはと一休和尚と違ひまして一休  
ましても如何又看官の御目たるきを厭ひ奉り最許話で一休雲水物語小もつりまはる  
さて和尚さまあまりあふい話で退屈一ま一極めて幾方共の別り易き手知の御話一  
聞のせ下されたいと言ひのあり和尚つくくと案玉ひて然らたおきやれ日本を  
ろが唐てんく追も此上もさきありがこきものも飯と汁やげは何とみかのし  
わあつとろ

一休和尚諸國物語終

ワカッタカ



明治三十四年七月五日印刷

全 年七月七日出版御届

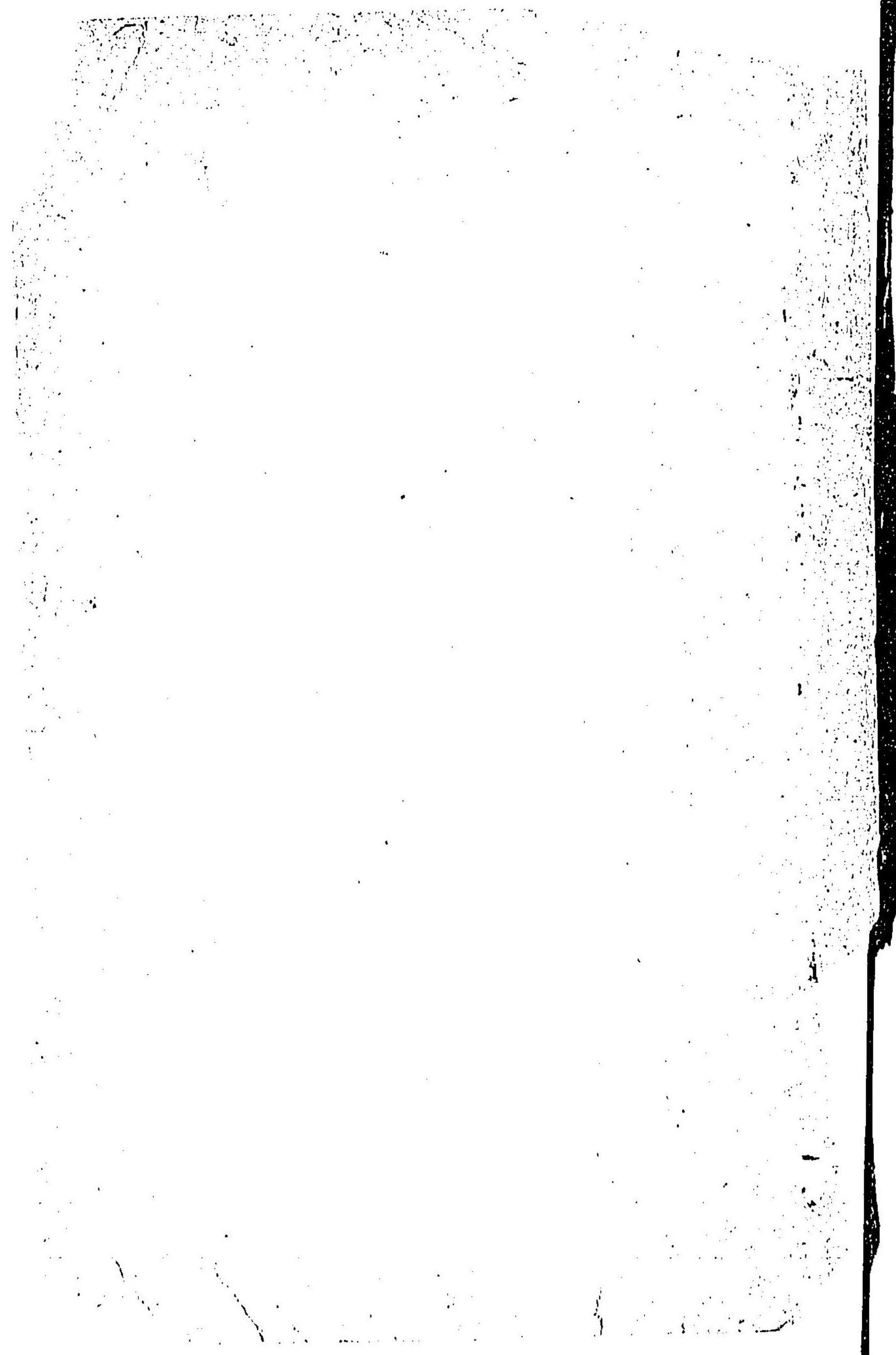
大阪府平民

編輯兼  
發行并  
印刷人

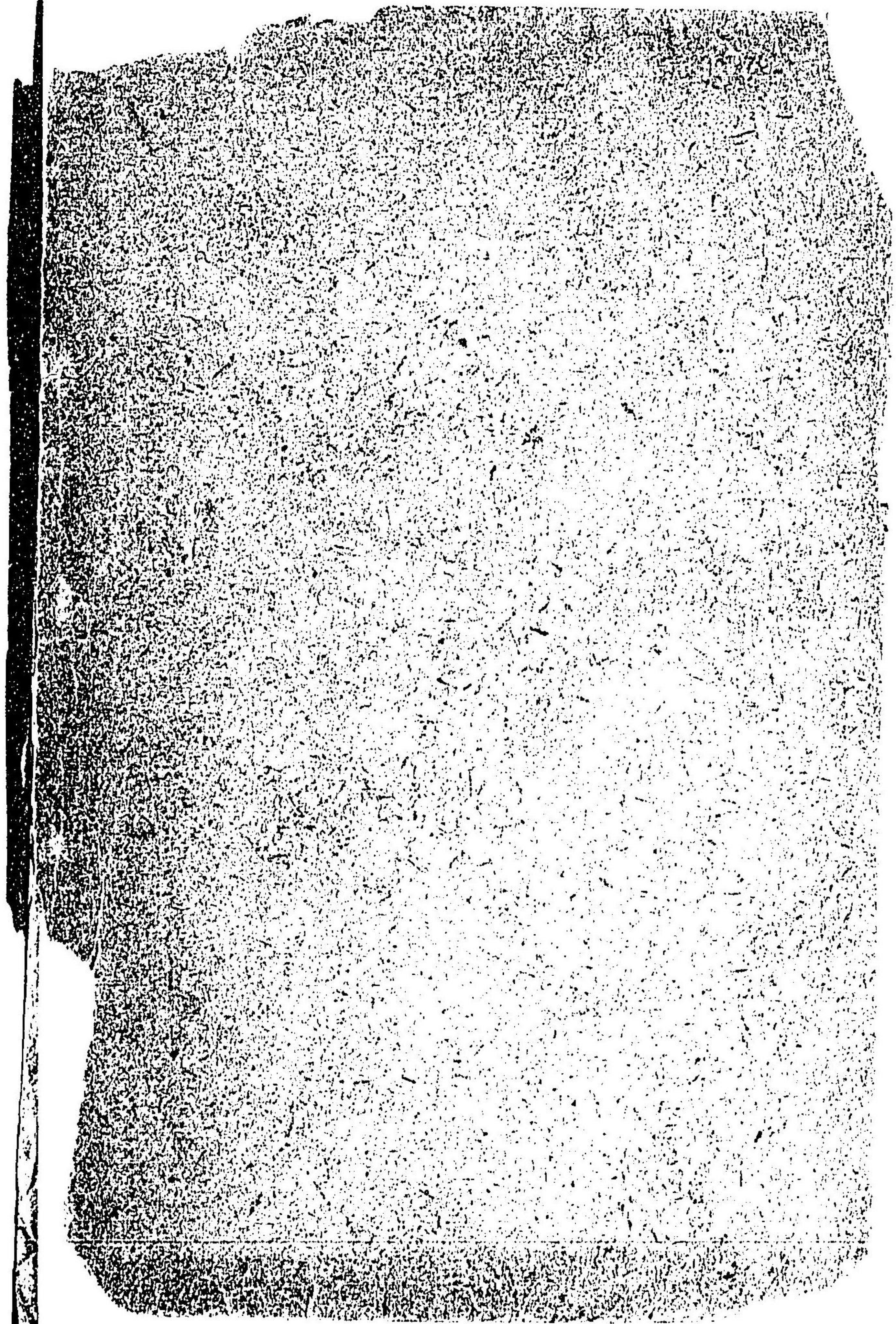
刃根松之助

大阪市南區大室寺町仲之丁  
三百七十六番屋敷











特60

129

205027-000-4

特60-129

一休和尚諸国物語

刀根松之助

M24

EDV-0019

